

日本海南東部（仮称）の 海域活断層の評価・公表方針

令和6年2月2日（金）

第25回海域活断層評価手法等検討分科会

日本海南東部（仮称）の海域活断層の評価方針 1 / 2

評価項目	評価方針
①評価対象断層の選定基準	日本海南西部の手法を踏襲
②活断層の可能性のある構造の取扱い	陸域の活断層の地域評価と同様に、付表として整理。
③断層の位置 （トレース）の決め方	- 日本海南西部の手法を踏襲 - 端点は基本的に変位が認められる測線と認められない測線の中点とする。 ただし、既存文献のトレースを採用する場合はその限りではない。
④断層トレースの端点の信頼度	日本海南西部の手法を踏襲
⑤評価単位区間の設定基準	日本海南西部の手法を踏襲
⑥海域活断層の命名	日本海南西部の手法を踏襲
⑦活動時の地震規模の推定方法	日本海南西部の手法を踏襲
⑧基準面と垂直変位量の読み方 および平均変位速度の算出方法	- 基準面は基本的に日本海南西部と同じくQ1層等とする。 - 日本海南西部と同様、縦ずれの変位から平均変位速度を計算（計算手法は今後審議）。 - 陸に近い断層では、海成段丘の高度等も変位速度の推定に使用できる場合があるので、そのような場合はそのデータも活用。 - 新しい年代の地層の構造を読み取る場合など、変位量の読み取りがQ1層基底の変位量の読み取りに比べて信頼性が高い場合は、信頼度を○や◎にすることを検討。
⑨1回のずれの量の推定方法	日本海南西部の手法を踏襲

日本海南東部（仮称）の海域活断層の評価方針 2 / 2

評価項目	評価方針
⑩断層のずれの向きと種類 （断層のすべり角）の推定 方法	・ 8分類とする。 ・ 断層の種類について大まかに分類しておき、個別の断層について審議が終わった段階で、すべり角の扱いを検討予定。 ・ 横ずれ断層と逆断層が混在する海域の取扱いは今後審議。 ・ 評価海域で発生した過去の地震の発震機構解などをレビューし、日本海南西部のときと同じ手法で横ずれ／縦ずれ比を適用。 ・ ただし、反射断面や地質学的・地形学的データから純粋な逆断層と推定可能な断層については、横ずれ成分が含まれることを想定する必要はない。
⑪断層面の下端の深さの決め方	・ 十分な地震活動があれば、それに基づいて下限の深さを推定。 ・ 地震活動が低調の場合は、日本海南西部と同様の考え方で下限の深さを推定。 ・ 重力探査、地殻変動等のデータも考慮。 ・ 震源深さに基づいて下端深さを決める際に、震源深さの信頼性（精度）を確認する必要あり。（【参考】武田ほか（2014、日本海PJ報告書）のD90）
⑫評価対象海域の設定と区域分け	・ 横ずれ断層と逆断層が混在する海域が存在するため、西から海域全体を一通り審議してから検討予定。

公表する特性表（案） 1 / 3

公表する特性表については、基本的に**日本海南西部のものを踏襲**する。

●位置と発生確率（日本海南西部の海域活断層の長期評価（第一版） p.8より）

地域細分	活断層のくくり (付録2)	評価単位 区間(付録2)	端点1				端点2				30年以内M $\geq$ 7の 地震発生確率 ^{注2)}	
				北緯	東経	信頼度		北緯	東経	信頼度	95%信頼区間 (中央値)	
東部	伯耆冲断層帯	東部区間	東端	35° 45'	134° 25'	○	南西端	35° 45'	134° 08'	○	3 - 7 (5)	評価領域 全体 8-13 (11)
		中部区間	北東端	35° 44'	134° 07'	○	南西端	35° 39'	133° 40'	○		
		西部区間	東端	35° 39'	133° 40'	○	西端	35° 34'	133° 24'	○		

●特性表（同 p.9より）

地域細分	活断層のくくり (付録2)	評価単位 区間(付録2)	断層長 (km)	信頼 度	各区間単独活 動の場合の地 震規模(M)	ずれの向きと種類			断層面の 傾斜方向	信頼 度	断層面 の幅 ^{注7)}	基準面の垂 直変位量 ^{注8)} (sec)	信頼 度	1回の ずれ量 ^{注9)}
						断層の 走向 ^{注6)}	種類	信頼 度						
東部	伯耆冲断層帯	東部	26	○	7.2程度	N90° W	右横ずれ	○	北傾斜高角	△	17km程度	0.03	△	3m程度
		中部	42	○	7.5程度	N103° W	右横ずれ	○	北傾斜高角	○	17km程度	0.03	△	4m程度
		西部	26	○	7.2程度	N111° W	右横ずれ	○	北傾斜高角	○	17km程度	不明	一	3m程度
		全体	94	○	7.7-8.1程度									

● 平均変位速度、平均活動間隔（日本海南西部の海域活断層の長期評価（第一版） p.56より）

ここで示す平均変位速度は、全ての評価対象の海域活断層帯で同じ断層すべり角の横ずれ／縦ずれ比の幅を用いて推定しており（詳細は3.（1）―6を参照）、個別の断層に特化した評価になっていないことから、評価単位区間によっては本来の値から外れた値になる可能性もある。注4）及び注5）については主文を参照のこと。

地域 細分	活断層のくくり (付録2)	評価単位 区間(断層番号)	地震の規模 (M)	平均変位速度 推定値 [根拠] (m/千年) ^{※1}	活動度	信頼度	平均活動間隔 (千年) ^{※2}	信頼度
	伯耆沖 断層帯	東部区間（1－1）	7.2程度	0.07-0.7 [縦横比]	B-C	△	4 - 40	△
		中部区間（1－2）	7.5程度	0.07-0.7 [縦横比]	B-C	△	6 - 60	△
		西部区間（1－3）	7.2程度	0.07-0.7 [1－2]	B-C	—	4 - 40	—

● 地震発生確率（参考）（同p.57より）

注4）及び注5）については主文を、注15）については説明文を参照のこと。また、薄い影を付した断層（評価対象区間）は垂直変位量が読み取れず、近隣の断層帯から平均変位速度を仮定して確率を算出している。

地域 細分	活断層のくくり (付録2)	評価単位区間 (付録2)	地震の 規模 (M)	今後30年以内における固有規模の地 震発生確率 ^{注15)} (%)		30年以内における痕跡を 認めにくい地震の発生確率 ^{注15)} (%)	
				95%信頼区間 (中央値)	計算方法	95%信頼区間 (中央値)	計算方法
	伯耆沖断層帯	東部区間	7.2程度	0.08－0.6 (0.1)	ポアソン	0.04-0.3 (0.06)	ポアソン
		中部区間	7.5程度	0.05－0.4 (0.09)	ポアソン	0.02-0.2 (0.04)	ポアソン
		西部区間	7.2程度	0.08－0.6 (0.1)	ポアソン	0.04-0.3 (0.06)	ポアソン

公表する特性表（案） 3 / 3

公表する特性表については、基本的に**日本海
南西部のものを踏襲**する。

- 海域の短い活断層（位置と長さのみ）
（日本海南西部の海域活断層の長期評価（第一版） p.54より）

長さ20 km未満の活断層		端点1			端点2			長さ (km)	図中の 記号※2
			北緯	東経		北緯	東経		
東 部	島前南東沖断層	東端	35° 51′	132° 43′	西端	35° 49′	132° 35′	12	a
	江津沖南断層	東端	35° 11′	132° 10′	西端	35° 10′	132° 02′	13	b

評価した海域活断層の位置と評価地域で発生する地震の発生確率

- 本日審議いただきたい事項
- 後日審議いただきたい事項
- 計算等により自動で決まる事項

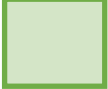
主査資料 での番号	活断層のくくり	評価 単位 区間	端点1				端点2				30年以内M ≧ 7の発生確率
				北緯	東経	信頼 度		北緯	東経	信頼 度	95%信頼区間 (中央値)
	隠岐海嶺南縁断層		西	36° 36'	134° 11'	△	東	36° 36'	134° 39'	△	
④	沖ノ礁北方断層帯		北	36° 05'	135° 05'	○	南	35° 53'	135° 10'	○	
⑤	経ヶ岬沖断層帯		南西	35° 50'	135° 05'	○	北東	35° 54'	135° 25'	○	
⑥	浦島礁北方北断層帯		北	36° 30'	135° 09'	○	南	36° 13'	135° 16'	○	
②⑦	若狭海丘列北縁断層		西	36° 33'	134° 50'	○	北東	36° 43'	135° 15'	○	
⑧	小浜沖断層帯		北西	35° 48'	135° 27'	○	南東	35° 33'	135° 40'	△	
⑫	越前岬西方沖南断層帯		西	35° 54'	135° 35'	○	東	35° 57'	135° 48'	○	
⑬	越前岬西方沖北断層帯		西	35° 55'	135° 31'	○	東	36° 06'	135° 53'	○	
⑦	浦島礁北東断層帯		北北西	36° 11'	135° 25'	○	南	36° 01'	135° 34'	○	

この審議用の特性表に従って審議を行う。

評価対象の海域活断層帯の特性（1）



本日審議いただきたい事項



後日審議いただきたい事項



計算等により自動で決まる事項

主査資料 での番号	活断層のくくり	評価 単位 区間	断層長 (km)	信 頼 度	各区間単独 活動の場合 の地震規模 (M)	ずれの向きと種類		信 頼 度	断層面の 傾斜方向	信 頼 度	発生 層下 限	日本海 PJによる 傾斜角	断層面の幅
						断層の 走向	種類						
	隠岐海嶺南縁断層		42	△	7.5程度	N90° W	北側隆起の逆断層		北傾斜中角		15	55	18km程度
④	沖ノ礁北方断層帯		23	○	7.1程度	N17° W	左横ずれ		ほぼ垂直		15	90	15km程度
⑤	経ヶ岬沖断層帯		30	○	7.3程度	N77° E	北西隆起の逆断層		北西傾斜中角		15	55	18km程度
⑥	浦島礁北方北断層帯		33	○	7.4程度	N17° W	左横ずれ		ほぼ垂直		15	90	15km程度
②⑦	若狭海丘列北縁断層		42	○	7.5程度	N64° E	南隆起の逆断層		南傾斜低角		15	35	26km程度

中略

⑱	加佐ノ岬沖断層		24	○	7.1程度	N38° E	南東隆起の逆断層		南東傾斜中角		15	55	18km程度
⑲	前ノ瀬	南東	28	○	7.2程度	N28° E	東隆起の逆断層		東傾斜中角		15	50	20km程度
⑳		西方	19	○	7.0程度	N46° E	北西隆起の逆断層		北西傾斜高角		15	60	17km程度
			47		7.6程度								

評価対象の海域活断層帯の特性（2）



本日審議いただきたい事項



後日審議いただきたい事項



計算等により自動で決まる事項

主査資料 での番号	活断層のくくり	評価 単位 区間	断層長 (km)	基準面の 垂直変位 量(sec)	基準 面年 代	水深	斜 補 正	垂 直 変 位 速 度	信 頼 度	幅方 向 変 位 量	1回の ずれ量	平均変位 速度 (m/ky)	活動度	信 頼 度	平均活動 間隔(ky)	信 頼 度
	隠岐海嶺南縁断層		42								約4m程度					
④	沖ノ礁北方断層帯		23								約2m程度					
⑤	経ヶ岬沖断層帯		30								約3m程度					
⑥	浦島礁北方北断層帯		33								約3m程度					
②⑦	若狭海丘列北縁断層		42								約4m程度					

中略

⑮	加佐ノ岬沖断層		24								約2m程度					
⑮	前ノ瀬	南東	28								約3m程度					
⑮		西方	19								約2m程度					
			47													

海域の短い活断層の位置

※短い活断層（5km～20km未満）は端点の位置のみ掲載

本日審議いただきたい事項

後日審議いただきたい事項

計算等により自動で決まる事項

主査資料 での番号	長さ20 km未満の 活断層	端点1			端点2			長さ (km)	図中の記号
			北緯	東経		北緯	東経		
参4	伊笹岬沖断層	西	35° 53'	134° 28'	東	35° 52'	134° 32'	6	
①	香住沖断層	南西	35° 50'	134° 38'	北東	35° 54'	134° 43'	10	
②	万十北断層帯	南西	35° 59'	134° 52'	北東	36° 04'	135° 02'	18	
⑨	浦島礁南方断層帯	北西	35° 55'	135° 26'	南東	35° 47'	135° 32'	16	
⑥	浦島礁北方南断層	北	36° 08'	135° 16'	南	36° 01'	135° 20'	14	
⑥	浦島礁北方中断層	北西	36° 12'	135° 14'	南東	36° 10'	135° 20'	10	
⑥	浦島礁北方東断層	西	36° 25'	135° 17'	東	36° 24'	135° 25'	11	
⑩	美浜湾断層	北	35° 51'	135° 53'	南	35° 41'	135° 56'	19	

日本海南東部（仮称）の海域活断層の評価・公表方針 修正案

令和6年2月2日（金）

第25回海域活断層評価手法等検討分科会資料において追加記載

1. 当初予定していた審議工程

- 当初の予定では、日本海南西部と同様に、対象海域全ての断層の審議を終えた後、評価文を作成し、令和6年度中に公表を行う予定であった。
- 具体的には、以下の工程を踏む予定であった。
 1. 個別断層のトレースの認定（評価単位区間の設定を含む）、命名、断層の種類（信頼度は後で）、傾斜（信頼度は後で）
 2. 個別断層の垂直変位量の読み取り
 3. 対象とする範囲、区域分け
 4. 個別断層の平均変位速度の算出、地震発生層の下限の深さの推定
 5. 発生確率の計算
 6. 評価文の作成

※各工程の審議中に、以前の工程の成果を修正する場合あり

2. 状況の変化

- ・令和6年1月1日、「令和6年能登半島地震」が発生。能登地方等で甚大な被害。
- ・この地震について、1月15日に開催した地震調査委員会では、以下のように評価されている。

- 能登半島西方沖から北方沖、北東沖にかけては、主として北東－南西方向に延びる複数の南東傾斜の逆断層が活断層として確認されている。この活断層が今回の地震に関連した可能性が高い。
- また、更に北東の佐渡島西方沖にかけては、主として北西傾斜の逆断層が活断層として確認されており、この活断層の一部が今回の地震に関連した可能性も考えられる。
- これまでの地震活動及び地殻変動の状況を踏まえると、2020年12月以降の一連の地震活動は当分続くと考えられる。特に今回の活動域及びその周辺では、今後強い揺れや津波を伴う地震発生の可能性がある。



- ①当該活断層は、日本海南東部（仮称）での評価を想定していた領域に存在する活断層であること
- ②今回の活動域やその周辺では、今後強い揺れや津波を伴う地震発生の可能性があるとして評価されていること

を踏まえると、**被災地やその周辺地域の防災計画検討等の支援のため、本分科会での評価の成果を迅速に公表することが求められる。**

3. 評価・公表の方針（案）

① 当面のスケジュール

- ・ 2月、3月に分科会で審議
- ・ 3月～5月頃に、公表項目について、長期評価部会及び地震調査委員会での審議・承認
- ・ 5月頃に公表

② 5月頃に最低限公表する必要がある項目

- ・ **これまでに審議した活断層、
令和6年能登半島地震に関連した可能性がある活断層、
その周辺の活断層の**
 - ・ **トレース**（端点の位置の経緯度、位置の信頼度、走向、長さを含む）
 - ・ **地震の規模**（松田(1975)のM-L式等により求める）
 - ・ **名称**

※トレースを地図に表す際には、審議した範囲がどこなのかを明示する。

③ 5月頃に可能なら公表する項目

- ・ 上記活断層の
 - ・ **断層の種類・信頼度**
 - ・ **1回のずれ量**（松田ほか(1980)の経験式等により求める）
 - ・ **傾斜・信頼度**
 - ・ **断層面の幅**

④ その後の公表の内容及びスケジュール

- ・ 範囲をどこにするか、
審議が終わった項目から順次公表するか、評価文をまとめて一括に公表するか
は今後検討

5月ごろに 公表する項目（案） 1 / 3（長い断層）

最低限公表する項目
 可能なら公表する項目

●位置と発生確率（日本海南西部の海域活断層の長期評価（第一版） p.8より）

地域 細分	活断層のくくり (付録2)	評価単位 区間(付録2)	端点1				端点2				30年以内M $\geq$ 7の 地震発生確率 ^{注2)}	
				北緯	東経	信頼度		北緯	東経	信頼度	95%信頼区間 (中央値)	
東部	伯耆冲断層帯	東部区間	東端	35° 45'	134° 25'	○	南西端	35° 45'	134° 08'	○	3 - 7 (5)	評価領域 全体 8-13 (11)
		中部区間	北東端	35° 44'	134° 07'	○	南西端	35° 39'	133° 40'	○		
		西部区間	東端	35° 39'	133° 40'	○	西端	35° 34'	133° 24'	○		

●特性表（同 p.9より）

地域 細分	活断層のくくり (付録2)	評価単位 区間(付録2)	断層長 (km)	信頼 度	各区分単独活 動の場合の地 震規模(M)	ずれの 断層の 走向 ^{注6)}	向きと種類		断層面の 傾斜方向	信頼 度	断層面 の幅 ^{注7)}	基準面の垂 直変位量 ^{注8)} (sec)	信頼 度	1回の ずれ量 ^{注9)}
							種類	信頼 度						
東部	伯耆冲断層帯	東部	26	○	7.2程度	N90° W	右横ずれ	○	北傾斜高角	△	17km程度	0.03	△	3m程度
		中部	42	○	7.5程度	N103° W	右横ずれ	○	北傾斜高角	○	17km程度	0.03	△	4m程度
		西部	26	○	7.2程度	N111° W	右横ずれ	○	北傾斜高角	○	17km程度	不明	—	3m程度
		全体	94	○	7.7-8.1程度									

上記のほか、

最低限公表する項目 : トレースを表示した地図、審議した範囲
 可能なら公表する項目 : 断層面の下端の深さ

5月ごろに 公表する項目（案） 2／3（長い断層）

●平均変位速度、平均活動間隔（日本海南西部の海域活断層の長期評価（第一版） p.56より）

ここで示す平均変位速度は、全ての評価対象の海域活断層帯で同じ断層すべり角の横ずれ／縦ずれ比の幅を用いて推定しており（詳細は3.（1）—6を参照）、個別の断層に特化した評価になっていないことから、評価単位区間によっては本来の値から外れた値になる可能性もある。注4）及び注5）については主文を参照のこと。

地域 細分	活断層のくくり (付録2)	評価単位 区間(断層番号)	地震の規模 (M)	平均変位速度 推定値[根拠] (m/千年) ^{※1}	活動度	信頼度	平均活動間隔 (千年) ^{※2}	信頼度
	伯耆沖 断層帯	東部区間（1－1）	7.2程度	0.07-0.7 [縦横比]	B-C	△	4 - 40	△
		中部区間（1－2）	7.5程度	0.07-0.7 [縦横比]	B-C	△	6 - 60	△
		西部区間（1－3）	7.2程度	0.07-0.7 [1－2]	B-C	—	4 - 40	—

●地震発生確率（参考）（同p.57より）

注4）及び注5）については主文を、注15）については説明文を参照のこと。また、薄い影を付した断層（評価対象区間）は垂直変位量が読み取れず、近隣の断層帯から平均変位速度を仮定して確率を算出している。

地域 細分	活断層のくくり (付録2)	評価単位区間 (付録2)	地震の 規模 (M)	今後30年以内における固有規模の地 震発生確率 ^{注15)} (%)	30年以内における痕跡を 認めにくい地震の発生確率 ^{注15)} (%)		
				95%信頼区間 (中央値)	計算方法	95%信頼区間 (中央値)	計算方法
	伯耆沖断層帯	東部区間	7.2程度	0.08-0.6 (0.1)	ポアソン	0.04-0.3 (0.06)	ポアソン
		中部区間	7.5程度	0.05-0.4 (0.09)	ポアソン	0.02-0.2 (0.04)	ポアソン
		西部区間	7.2程度	0.08-0.6 (0.1)	ポアソン	0.04-0.3 (0.06)	ポアソン

5月ごろに 公表する項目（案） 3 / 3（短い断層）

最低限公表する項目

- 海域の短い活断層（位置と長さのみ）
（日本海南西部の海域活断層の長期評価（第一版） p.54より）

	長さ20 km未満の活断層	端点1			端点2			長さ (km)	図中の 記号 ^{※2}
			北緯	東経		北緯	東経		
東 部	島前南東沖断層	東端	35° 51'	132° 43'	西端	35° 49'	132° 35'	12	a
	江津沖南断層	東端	35° 11'	132° 10'	西端	35° 10'	132° 02'	13	b

上記のほか、
最低限公表する項目 ： トレースを表示した地図、審議した範囲

5月ごろに 公表する特性表（案） 1 / 2

●評価対象断層の特性表

※断層の名称については今後審議予定

活断層のくくり	評価単位区間	端点1				端点2				断層長 (km)	信 頼 度	各区間単独活動 の場合の 地震規模(M)	断層の走向	断層面の 傾斜方向	信 頼 度	断層面の幅	1回の ずれ量
			北緯	東経	信頼度		北緯	東経	信頼度								
隠岐海嶺南縁断層		西	36° 36'	134° 11'	△	東	36° 36'	134° 39'	△	42	△	7.5程度	N90° E	北傾斜中角		18km程度	約4m程度
沖ノ礁北方断層帯		北	36° 06'	135° 04'	○	南	35° 53'	135° 09'	○	25	○	7.2程度	N163° E	ほぼ垂直		15km程度	約3m程度
経ヶ岬冲断層帯		南西	35° 47'	135° 09'	○	北東	36° 00'	135° 26'	○	36	○	7.4程度	N46° E	北西傾斜高角		17km程度	約4m程度
小浜冲断層帯		北西	35° 48'	135° 27'	○	南東	35° 33'	135° 40'	△	33	△	7.4程度	N144° E	ほぼ垂直		15km程度	約3m程度
浦島礁北方北断層帯		北	36° 30'	135° 10'	○	南	36° 11'	135° 20'	○	40	○	7.5程度	N157° E	ほぼ垂直		15km程度	約4m程度
若狭海丘列北縁断層		西	36° 33'	134° 51'	○	北東	36° 43'	135° 16'	○	41	○	7.5程度	N62° E	南傾斜低角		26km程度	約4m程度
越前岬西方冲北断層		西	35° 55'	135° 31'	○	東	36° 06'	135° 53'	○	38	○	7.5程度	N60° E	北傾斜高角		17km程度	約4m程度
浦島礁北東断層帯		北北西	36° 11'	135° 25'	○	南	36° 01'	135° 33'	○	23	○	7.1程度	N147° E	ほぼ垂直		15km程度	約2m程度
ゲンタツ瀬・大グリ南東縁断層帯	ゲンタツ瀬	南西	36° 10'	135° 41'	○	北東	36° 18'	135° 51'	○	20	○	7.0程度	N47° E	北西傾斜高角		17km程度	約2m程度
	大グリ	南西	36° 14'	135° 52'	○	北東	36° 29'	136° 08'	○	35	○	7.4程度	N41° E	北西傾斜高角		17km程度	約4m程度
										52		7.7程度					
加佐ノ岬冲断層		南西	36° 30'	136° 01'	○	北東	36° 40'	136° 12'	○	25	○	7.2程度	N40° E	南東傾斜高角		17km程度	約3m程度
長平礁断層		西	37° 03'	135° 39'	○	東	37° 05'	135° 59'	○	30	○	7.3程度	N84° E	南傾斜高角		17km程度	約3m程度
羽咋冲東断層		南	36° 48'	136° 34'	○	北	37° 04'	136° 32'	○	30	○	7.3程度	N176° E	西傾斜高角		17km程度	約3m程度
羽咋冲西断層		南	36° 52'	136° 27'	○	北	37° 04'	136° 29'	○	21	○	7.0程度	N9° E	西傾斜高角		17km程度	約2m程度
内灘冲断層		南西	36° 44'	136° 02'	○	北東	36° 58'	136° 12'	○	29	○	7.3程度	N29° E	南東傾斜高角		17km程度	約3m程度
海士岬冲東断層		南西	37° 05'	136° 30'	○	北東	37° 14'	136° 38'	○	22	○	7.1程度	N37° E	南東傾斜高角		17km程度	約2m程度
海士岬冲西断層		南西	37° 03'	136° 24'	○	北東	37° 12'	136° 32'	○	20	○	7.0程度	N35° E	南東傾斜高角		17km程度	約2m程度
門前冲断層		南西	37° 12'	136° 30'	○	北東	37° 17'	136° 43'	○	22	○	7.1程度	N62° E	南東傾斜高角		17km程度	約2m程度

・
・
・

5月ごろに 公表する特性表（案）2／2

●海域の短い活断層（位置と長さのみ）

※断層の名称については今後審議予定

長さ20 km未満の活断層	端点1			端点2			長さ(km)	図中の 記号
		北緯	東経		北緯	東経		
伊笹岬沖断層	西	35° 53'	134° 28'	東	35° 52'	134° 32'	6	
香住沖断層	南西	35° 50'	134° 38'	北東	35° 53'	134° 43'	9	
万十北断層帯	南西	35° 59'	134° 52'	北東	36° 04'	135° 02'	18	
浦島礁南方断層帯	北西	35° 55'	135° 26'	南東	35° 47'	135° 32'	17	
浦島礁北方南断層	北	36° 08'	135° 16'	南	36° 01'	135° 20'	15	
浦島礁北方東断層	西	36° 24'	135° 16'	東	36° 24'	135° 25'	13	
美浜湾断層	北	35° 51'	135° 53'	南	35° 41'	135° 56'	19	
越前岬西方沖南断層	西	35° 53'	135° 35'	東	35° 56'	135° 47'	19	
越前岬西方沖中断層	西	35° 56'	135° 35'	東	35° 58'	135° 46'	17	
ゲンタツ瀬南東断層	北	36° 14'	135° 52'	南	36° 07'	135° 54'	13	
ゲンタツ瀬南方断層	北	36° 10'	135° 43'	南	36° 05'	135° 45'	11	
前ノ瀬南方断層	南西	36° 57'	136° 14'	北東	37° 04'	136° 21'	18	
沖ノ瀬断層	南	37° 07'	136° 20'	北東	37° 15'	136° 24'	16	
上越海丘近海断層	西	37° 30'	137° 39'	東	37° 29'	137° 47'	13	